三原史跡めぐり
“失われた遺跡（もの）への哀愁・古（いにしえ）を偲ぶ”

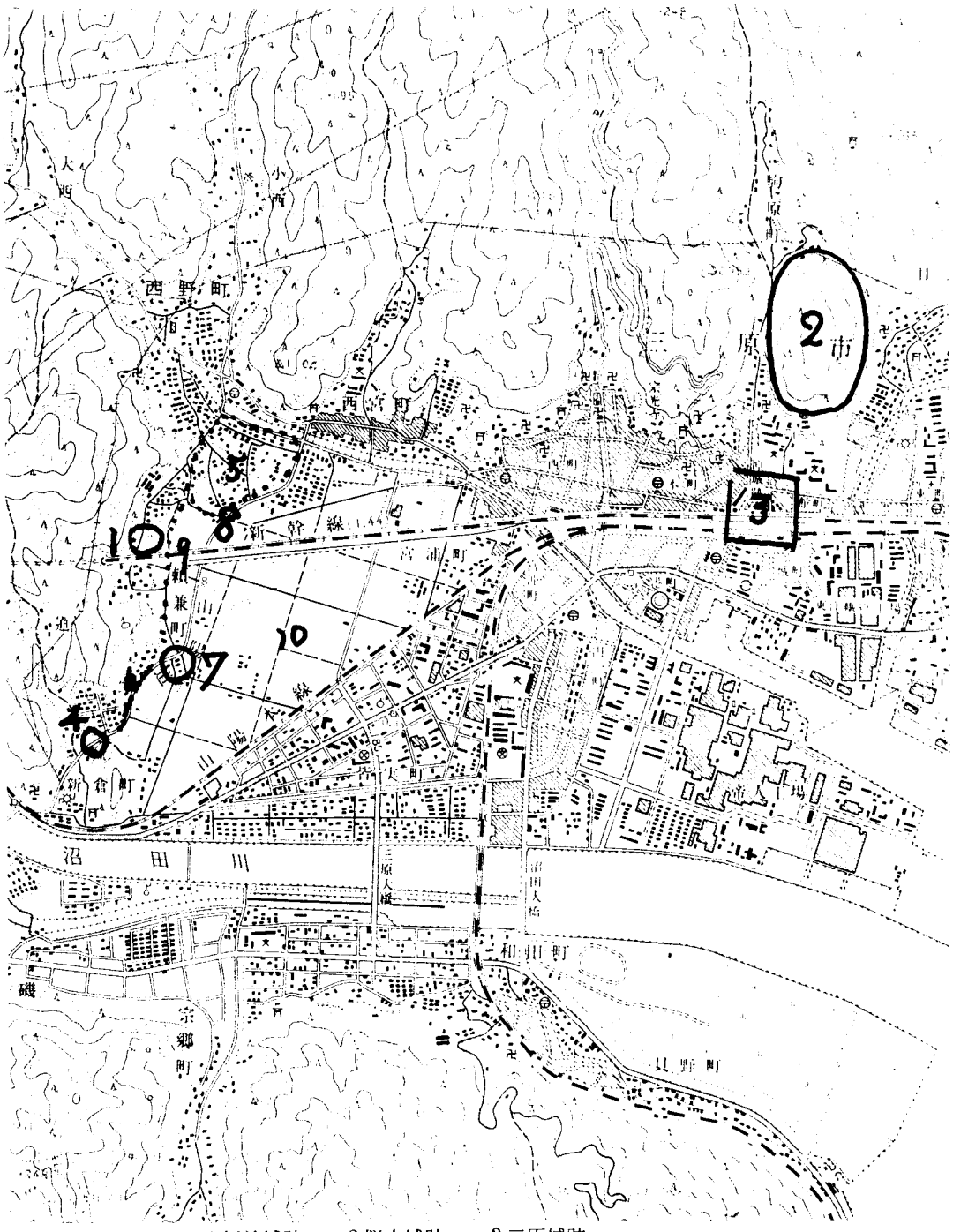
末森　清

備陽史探訪の会に入会し、多くの方々と史跡めぐりをして勉強するうちに、自分の近くに色々と多くの遺跡がある事に気がつく。それらはけっして有名なものでなく古くから伝わり、親しまれそしていつか失われていったものが数多くある。地名もそうだし、野仏、石標、小さな城跡、峠、古道、並木、町並、等々きりがない。これら失われたもの、くちていきつゝあるものをもう一度誌上に出してみたいと考え自分なりの「三原史跡めぐり」として「失われた遺跡（もの）への哀愁、古（いにしえ）を偲ぶ」という題にして文を作ってみた。　その始めが「仏ケ峠」　つまりこの地、芸備国境地であると同時に自分の住んでいる団地新倉ハイツの登（入）り口でもある。自分の家、団地の玄関口に当る所にある今は忘れられた地名である仏ケ峠をスタート台としていつ終るか分らぬ自分流の遺跡探訪をしてみたいと思っている。自分が朝夕必ず通るこの「仏ケ峠」を中心に西に東に足をはこんで歴史や遺跡を学んでいきたい。

その１　山陽街道に沿いて

◉ 頼兼城跡（よりかねじょうし）「頼山陽先生遠祖の地」

三原市頼兼町に小早川時代（室町後期戦国時代）の城跡がある。今から４３６年前の天文１６年（１５４７）城主であった岡崎十郎左衛門頼兼は、小早川隆景によって亡ぼされ廃城となったと言われる。城跡は三原平野の西方（三原駅「三原城跡」より約２キロメートルの所）にあり、通称「三原富士」と呼ばれる頼兼山の山麓にあり、山すそより岬（舌状）の様な地形の台地になっている所にある。この附近の田畑はうめられ人家が建ちこんでいるが、城跡は小さな舌状の丘になっており、上部は畑になっており、その廻りの崖は、竹や雑木が繁り城跡らしい面影をわずかに残している。今、城跡には昭和２７年三原市によって建てられた石碑があり、表面には「頼山陽先生遠祖頼兼城跡」、裏面には「城主、岡崎十郎左衛門頼兼天正年間故ありて廃せられ子孫永く此地方に住し後竹原に移る。山陽先生は、竹原頼五世春水の子也」と記されている。この頼兼城跡に調査の手が入ったのは、山陽新幹線の橋構が城跡の一部にかゝり、取りこわされるため、三原市教育委員会によって、城跡一帯を調査し



1.頼兼城跡　2.桜山城跡　3.三原城跡
4.仏ケ峠(芸備国境地)　5.頼兼新田一帯(1622干拓)
6.とうのはま　7.舟山(神功皇后伝説の地)
8.山陽街道(頼兼封彊(堤防))9.横山新田(1644干拓)
10.宮沖新田一帯(1700干拓)

た。その結果、城に使用された石垣、建物の遺構、堀（空堀）等の跡は、確認出来なかったとの事である。この城跡にまつわる言い伝えは次の様に語り継れている。

① 地元の語り伝え

「頼兼城悲話」

昔、岡崎十郎左衛門頼兼という士が木梨の郷（現西野町頼兼町一帯・西野町は以前木梨の郷と呼ばれていた）に城を築いていた。

十郎左衛門は、小早川家に属しており、小早川隆景が備後神辺城を攻める時、十郎左衛門にも出陣する様に命令したが、自分の妻と神辺城主の妻とは姉妹であり、思いなやんだ末、命令にそむき出陣しなかった。隆景は大変立腹して、神辺城攻撃の帰りに頼兼城を攻めた。十郎左衛門以下７５名、城にたてこもり戦ったかいもなく破れ一族全員自害し城に火をつけ亡んだ。城主十郎左衛門は、隆景が、神辺城より帰り糸崎へ陣をはったと聞き自分の妻を宇都戸の城主丹下氏の元へ帰した。身ごもっていた妻は丹下氏の家で男子を生みその子は成長して、五郎左衛門と名乗った。

五郎左衛門は、丹下氏が没落したゝめ西野村へ帰り世をはゞかり、姓を岡本と改めて鍛冶屋を営んでいた。その後子孫は代々続いている。頼山陽の祖先は、この岡崎家から分家し竹原に出たと言われている。頼兼の「頼」という字をとって姓を「岡崎」から「頼」にかえたと言われる。そんな事から頼山陽は度々西野村に来たと言われる。

現西野町大西にある辻堂の柱には頼山陽が梅観をした時、らくがきをした文字（詩文）が残っている。（唯し今は消えて読めない）

らくがきの詩文は辻堂の横に記念として石碑にきざんである。

以上所々に地元の人たちより伝えられた話である。

② 頼兼城を記した文献について

頼兼城跡が文献に出てくるのは次の様な古文書書物があるので記しておく。（頼兼城跡調査書より）

◉文化１１年（１814）

「国郡志編集御用諸品書出」西野村　　古城跡として記述

◉文政２年（1819）

「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳」　御調郡西野村

古城跡として記述（内容は文化１１年と同じ）

◉文政３年（1820）

「芸備通志」　巻百　　備後国御調郡６　　城虚として記述

◉大正１３年

「広島県史」　第３編　　頼兼城として記述

◉大正１４年

「御調郡史」　　沢井常四郎著　　岡崎十郎左衛門の記述

◉昭和４２年

「神辺町史」　　前巻　　杉原忠興の項の中に岡崎氏の記述あり

◉天明の頃

「備後の国　三原廻」　　頼兼封彊の中に記述あり

これらの文献の中より「国郡志編集御用諸品書出帳」西野村の記述を引用する。

〝一、古城跡　頼兼　岡崎十郎左衛門頼兼、但シ当村地名ニ相成申候　城主ノ名乗也

右、岡崎十郎左衛門頼兼者、高山之城主小早川之族下也、其刻隆景公神辺之城江討手被差向、頼兼茂為加勢可罷越旨被命時ニ、頼兼ノ室ハ宇都戸之城主丹下氏ヨリ娶、亦神辺之城主茂同丹下氏ヨリ娶皆一門也、依之　拒主命神辺責ニ出張無之、然ル処小早川之追手神辺之城ヲ責落帰陣、為岡崎責糸崎江陣ヲ被居、岡崎ニ者其節室懐妊ニ而有之候ニ付舅丹下氏江送返シ、城主十郎左衛門頼兼始一族家人七拾五人切腹、城ニ火ヲ掛ケ焼之仕候由、当村頼兼の祝神与申候而　御座候

右頼兼室丹下氏江帰子誕生、岡崎五郎左衛門ト云、丹下氏没落之後当村へ帰、小早川家之詮索ヲ恐レ性(姓)ヲ岡本ト改、鍛治之業ヲ名目ニいたし住居、寛永１１年戌歳相果、法名悟法全了禅定門与申候、其子五良左衛門、其子五左衛門西野村庄屋役相勤、其子市良右衛門、其子市左衛門、其子市左衛門、其子かじ屋理兵衛当時亭主ニ而七代相続仕候、家紋和泉角ニ地翁、名乗ニ頼之字相用ひ申候、同姓の者左之通

鍛治屋合分源次郎　鍛治屋合分藤十郎　藤十郎合分幸蔵　幸蔵合分仲七　鍛治屋大本両家者、元祖五郎左衛門岡崎ヲ岡本ト改名仕、以後今ニ岡本ヲ相用ヒ、藤十郎幸蔵両家長沢之苗字相用ヒ申候、是者就中改名ニ御座候、鍛治屋より相分レ候節者皆岡本ニ御座候、右末孫之もの毎歳霜月に相集、頼兼之祝神へ幣七拾五本献神祭仕候、城跡之石垣者往還築替ニ付被用候。〟

以上、前記の「地元の語り伝え」と同じである。

この古文書によると、戦国時代に、頼兼城は築かれ岡崎十郎左衛門頼兼の居城であり、小早川家に属していた。天文１６年（１５４７）大内、毛利、平賀氏等による神辺城攻撃するにあたり、小早川隆景は、頼兼に参戦する様命じたが、頼兼は自分の妻が、神辺城主の杉原忠興の妻と姉妹の間柄であるためこの命令を拒んだ。（頼兼の妻と忠興の妻は宇津戸（世羅郡甲山町）の丹下氏より嫁いでいる。）

小早川隆景は、神辺城の攻撃を終えて帰陣の途中糸崎に陣をはり頼兼を討つ事にした。

頼兼は、この報を聞き懐妊している妻を丹下氏の元へ帰し、自らは戦をさけて一族７５人と共に切腹し城に火をかけ亡んだ。

頼兼城は天文１６年焼失、岡崎氏も名目上亡び以後城は用いられる事なく荒れていった。城跡に残っていた石垣は元和８年（１６２２）当時の三原城主浅野忠吉による頼兼新田の干拓や元禄期に行われた山陽往還道の整備によりとりこわされて使用されたとある。

以上「頼兼城跡調査報告書」より

実家である丹下氏の元へ帰った頼兼の妻は、こゝで一子が誕生、岡崎五郎左衛門と名乗り生長したがその後丹下氏も亡び、五郎左衛門は亡父の地西野村に帰り、小早川氏の詮索をおそれて、姓名を岡本と改め鍛治屋を営み生計をたてゝいたが、寛永１１年死去、その後子孫は七代続いているという。

岡崎十郎左衛門頼兼（頼兼城主、天文１６年自刃

↓

岡本五郎左衛門　(1)（岡崎改岡本と姓を名乗る）

↓

五良左衛門　(2)

↓

五左衛門 (3) （西野村庄屋役相勤）
↓
市良衛門 (4)
↓
市左衛門 (5)
↓
市左衛門 (6)
↓
理兵衛 (7) 鍛治屋 分家 源次郎（岡本）
分家 藤十郎（長沢）
分家 幸蔵 （長沢）
分家 仲七

家紋は和泉角ニ地翁

名乗りは「頼」之字を用いる。

㉓ 頼兼の祝神について

頼兼城跡より西南の地約１００メートルの所の山すそに頼兼の祝神と呼ばれる伝岡崎家の墳墓がある。毎年霜月（陰暦１１月の事）子孫一族がこの小祠に集り、幣７５本（自害した７５人の事か？）を献じ神祭を行ったと伝えられている。この岡崎家の墳墓は、小祠と五輪塔、一石五輪塔苔むし今もある。「頼兼城調査書」には次の様に記してあるので転記しておく。

〃 墳墓は東南向きの斜面に前面のみ大形の角礫を用いて長さ２メートル、幅0.８メートルの方形基壇を作り、その内に砂利を敷き五輪塔を安置したもので、その内側には、径８０センチの松の大木が植えられている。五輪塔は動かされた形跡があり、周辺にあったものを集めた可能性も考えられるが、すべて花崗岩製で、空風輪、火輪、水輪、地輪、の計６基以上があり、同１基壇内に一石五輪塔３基石仏１基がある。

空輪塔は一石で作ったもので径２０センチ、高さ２５センチ以上あり中央よりやゝ下部に構をあけて境とし、頂部は段がつくように尖らせている。

火輪は１辺２０～２６センチあり、底辺に比べ高さの低いものと、比較的高いものの、２種がある。

水輪は径２３～３０センチあり、上下面は平らにし、側面のみ丸みをつけている。形態的には上部が小さくなったものと、どっしりした楕円形のものに分けることが出来る。

地輪は１辺１８センチのものと２８センチのものがあるが、いずれもどっしりしており中央にほぞ穴がある。

一石五輪塔は高さ６０センチで五輪塔の形をきれいに彫ったものと、空風輪を欠く現高６８センチのもの、それに空風火輪部が極度に簡素化された高さ４８センチのものがある。

石仏は五輪塔の間に立てられていたもので、高さ３６センチの舟形の台石に仏の座像を浮彫したものである。

この墳墓については、その基壇が動かされておらず、五輪塔の形態は室町期の様相をもつものであることから、時期的、距離的にも、頼兼城と何かの関係があったものと思われる。〃

以上「頼兼城跡調査書」より

この頼兼城跡に立って三原市を一望にながめていると、この城にまつわる不明な事が多い事に気がつくというよりまるで何も分ってないと言った方が良い。これを仮に「頼兼城跡の謎」として今後色

々と調べて見たいと思う。

① ありし頃の頼兼城の姿

どの様な城だったのか？　居館又は水軍城、山城、いずれだったのか。

② 城主岡崎十郎左衛門頼兼とはどの様な武士だったのか。一地方の豪族だったのか。

③ 小早川氏との関係について。

④ 小坂の稲村山城（田坂一族）、三原の大島小島（現三原城になっている所）の砦との関係は、以上の事柄を中心として探究していきたい。

◉ 仏ケ峠　「山陽往還道　芸備の国境地なり」　今は忘れられた地名

仏ケ峠は江戸時代よりの山陽往還道（昭和３８年頃迄は国道２号線）上にあり、安芸と備後の国境地である。峠は昭和２０年代迄は、北側南側とも山で松の木が繁り日中でもうす暗く坂もかなり急坂であり、昔は追剥が出たという位さびしい所であった。今は北側の山はけずりとられ新倉ハイツという団地になっており、南側の山もけずりとる工事中で数年後には小学校が建設される。この様にこの峠はすっかり開けてしまい、今は峠のイメージは何ひとつ無い。急坂だった道も改修工事等でけずられどこにでもある唯の坂道という位である。唯１つ団地へ入る入口の峠の所に明治３年に建てられた石標があり、その表面に従是東　備後國　従是西　安芸國という文字が読める。これが峠であり芸備の国境地であったという「証」で昔を偲ぶ以外にない。この仏ケ峠の地名を古文書等の文献で調べて見ると次の様なものがある。

国郡志御用ニ付下しらへ書出帳　御調郡　西野村　文政２年

1. 本往還道

壱筋　本駅筋往還

東茅町境より西沼田下村境仏ケ峠迄拾三丁拾九間

1. 芸備御境木

当村沼田下村境仏ケ峠ニアリ、年数ヲ歴損候節者沼田下村与申談、当村ヨリ三原表へ御注進申上候得者、御調郡御役所へ御駈合被為在候而、広島ヨリ両郡御代官様御立合時ニ寄候得者、御番組様斗御立会御建被為成候。

国郡志編集御用諸品書出　2.　西野村　文化１１年

1. 村内境目

西　沼田下村、西南　田之浦村、東南　須波村、東　山中村、北　加井知村　右五ケ村懸リ周廻凡５里、但　横山ノ鼻仏ケ峠、金久保山能井屋之峠、掛ケ石嬉ケ峠　横峯つゝきか峯　榎木谷樫木ざや斎ケ峠　登りか峯草提ひそう木こうじ谷槙ケ峠　大目木泰雲寺町　ヲ赤石境へ沖ハ小島

1. 三　原

当御城開ケ不申内者東泰雲寺今沖ハ船入小島西者仏ケ峠横山之鼻迄皆木梨村也（以下略）

1. 茅町ヨリ仏ケ峠　沼田下村境迄拾三町余本往還。

備後　三原廻　日本行程記に地蔵峠とあり（仏ケ峠の事）　仏ケ多尾（仏ケ峠）

船山の南に有、北山備后西南の究意なり、東西は宮沖新開に向ひ、後は往還道にして、芸備国境の

榜示有、是　南は豊田郡に属す。
以上の古文書各行に仏ケ峠の記事が見える。　古(いにしえ)はきちんとした峠名であった事が分る。
この地名の言はれは次の様な伝い伝えがある。
「仏ケ峠」の伝われ
　勝山（荒神山とも言う）の北の凹んだ所が、「仏ケ峠」と言われ、こゝが備後における西国路の境目で越えると安芸の国へと入っていく。この峠の上に地蔵尊が安置されて、その前は格好の休み場所であった。そうした事から、この峠の名も「仏ケ峠」と呼ばれたのであろう。
……「三原昔話」　白松克太著より……
この峠が出来たのはそう古い事ではない。元和８年（１６２２）頼兼新田が開かれ、正保元年（１６４４）横山新田が開かれたと伝えられており、当時潮止めとして築かれた頼兼提防が、山陽道として整備されこの頃までは、南側の勝山と北側の横山が山続きでちいさな小道が通っていたのを切開いて通り易い様に改修したのではなかろうか。正保の頃より広い歩き易い峠道となったのだろう。当時より峠上に安置されていた地蔵尊は工事にたずさわった人々が安全を祈って祭ったか又は工事中に死傷者があってそれをとむらうために祭ったのかも知れない。その昔、この峠を越える村人や旅人は峠に安置してある地蔵に手を合せ安全を祈り一息入れてから西に東にと下っていった事だろう。この地蔵いつの頃からなくなったのだろうか。今はその面影もなく、人々から忘れ去られてしまった。唯ひとつ芸備国境を記す石標が、あたりの風景にも、とけこめずポツンと建っており古の峠だった事を偲ばすのみである。
仏ケ峠への交通は、三原駅前より市営バスで、新倉行に乗る。約１５分位で終点に着く。着いた所が峠でありバス停の前に芸備国境の石標がある。

（三原市新倉６―２０）